

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	林 美 希
論 文 題 目	唐代前期における北衙禁軍と宮廷政変
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、中国唐王朝前半期(7～8世紀半ば)における北衙禁軍の構造と、当該時代に度重なって起こった宮廷政変との関係を分析した研究である。北衙禁軍とは、唐の都・長安城(一時洛陽城)の北方に配置された皇帝近衛兵を指し、騎馬軍によって構成される。唐王朝前半期の政治史は、皇位継承や朝廷内の実権争いから何度も政変が起こる点を大きな特徴とするが、その際には必ず北衙禁軍が連動した。本論文は、この政治構造にわが国で初めて本格的に切り込んだ研究である。</p> <p>本論文は全5章よりなる。これらはいずれも既発表論文であり、そのうちの3章は査読付きの全国学会誌に掲載された。</p> <p>第1章では、宮廷政変における北衙軍の動き方を整理する。北衙軍は決まって宮城北門から南下して宮城全体を制圧した。そして政変は、禁軍出動権の掌握、宮城の制圧、君臣関係の再構築の手順を踏むとする。</p> <p>第2章では、北衙禁軍の構造とその時代的変遷を取り上げる。北衙は、「宿衛兵」(宮城守備兵)と「親衛兵」(皇帝護衛兵)の二系統から成り立ち、後者の勢力が前者を凌駕してゆく歴史を歩む。この両系統の衛兵団のパワーバランスと政争とが絡み合った時に、宮廷政変が生じるとする。</p> <p>第3章では、北衙が騎馬軍団であったことから、その軍事力を支えた皇帝牧場のあり方を取り上げる。唐の皇帝牧場は「閑廐」といい、それは第2章で取り上げた親衛兵の拡大と歩調をあわせて発展した。閑廐運営の実権は閑廐使が掌握し、閑廐馬の迅速な出動を指揮したので、政変の成否はこの閑廐使の取り込みにかかっていたという。</p> <p>第4章では、その閑廐への軍馬供給システムを分析する。閑廐馬の基本的な供給源は地方の官営牧場「監牧」にあり、そこから良馬が選抜されて京師に上納されたことを確認し、その選抜システムを馬印の行政方法に着目して解明した。</p> <p>第5章では、玄宗の政権掌握を実現させた親衛兵系統の「龍武軍」に焦点をあてる。以上の発展をたどって北衙禁軍の行き着いた先が龍武軍であり、この段階での北衙は親衛兵系統が完全に勢力を逆転させて優位に立っていた。龍武軍中心の北衙の安定性こそが、玄宗の長期政権を支えたとする。ただし、辺境地域には節度使という専門兵を配備したので、龍武軍は徐々に戦闘能力を低下させ、結局は安史の乱に対抗できなかったという。</p> <p>以上のように、本論文は、唐代前半期における北衙禁軍の制度的構造とその歴史的変遷、中央政府による馬政管理システムを分析し、その上に宮廷政変勃発とその要因を位置付けた研究である。従来の研究では、特にわが国においては、この北衙の構造と性格を取り上げて専論したものはほとんど見られず、それを正面から問い直して上記の結論を導き出した手腕は高く評価されるべきである。また、史料分析の能力とそれによる論理の組み立ても、十分に水準に達している。</p> <p>本論文の特に優れた点として、次の3点があげられる。すなわち、① これまでは北衙禁軍といえば漠然と近衛兵ととらえられてきたが、実は北衙には宿衛兵と親衛兵の二系統が存在し、それらの相互の確執が北衙の拡大発展をもたらした点を明らかにしたこと、② 唐代前期に起きた宮廷政変を逐一ピックアップし、それを北衙の発展史に位置付けて説明したこと、③ 唐王朝の馬政の運営を、良馬の中央上納システムという視点を導入することによって、より立体的に描き出したこと、である。</p> <p>これらを、従来の研究動向と照らし合わせれば、次のようにいえるであろう。</p> <p>まず、①の兵制史研究についていえば、これまでは地方軍府から兵力が供給される「府兵制」にのみ研究が集中し、唐代最強軍といわれた北衙にはほとんど研究の目が向けられていなかった。府兵制研究はすでに数多</p>	

氏名 林 美希

くの論考が発表されているが、その一方で北衙史は全くといってよいほど等閑視されてきたといっても過言ではなく、ようやく近年中国で数本の論考が公にされた程度である。本論文は、それらも批判的に参照し、論文提出者独自の解釈によって北衙禁軍の歴史を組み立てている。

②の政治史と宮廷政変の研究についていえば、これまでは初代皇帝高祖から第2代皇帝太宗に移行する際に起きた「玄武門の変」にのみ研究が集中し、それ以後の五度の政変はほとんど取り上げられることがなかった。論文提出者は、それらの政変の性格を分析し、北衙禁軍の発展過程と政変勃発との関係を明らかにした。本研究によって、唐代前期の北衙禁軍が王権を支える基盤であったとともに、同時にそれは王権を再生産する装置としても機能したことが一層明確に認識されるようになったといつてよい。

③の馬政の問題についていえば、これまでの研究は地方牧場である「監牧」の運営の解明にのみ集中していた。それに対して提出者は、中国前近代の王朝が行った牧場経営の最大の目的は、戦闘に優れた馬を中央に集めることにこそあった点を指摘し、そしてそのシステムを行政法の新史料(『天聖令』厩牧令)も取り入れて、馬印行政というユニークな視点から解明した。

以上のように見ると、本論文の最も優れた点はまさにその着眼点にあるといえよう。本論文で扱ったテーマは、わが国では提出者が初めてメスを入れた分野なのである。しかも、関連史料を真摯な研究姿勢で解読・分析し、新たな軍事史と政治史を構築した成果は、高く評価されてしかるべきである。

ただし、だからこそ残された問題も大きい。たとえば、本論文の「結語」で提出者自身が触れているように、唐代後半期の禁軍のあり方との関係は、その一つである。当然ながら本研究を踏まえて、唐後半の禁軍体制の性格とそれが北宋の禁軍へと移行する経緯が問い直されねばならない。そこには、唐前期の北衙禁軍体制を瓦解させた安史の乱をあらためて考察すべきであろうし、また地方節度使と中央禁軍の関係も分析しなければならないであろう。

さらにいえば、本研究は国際関係をも視野に入れねばならないであろう。なぜならば、唐は一時モンゴリアや中央アジアにまで勢力を拡げ、それらの地の君長階層が唐皇帝と君臣関係を結んで唐の外地支配は成り立っていた。そして、彼らの軍事力を利用するために、唐は北衙を媒介としてその君臣関係を維持したと想定されるからである。とすれば、本研究は、多民族複合国家としての唐王朝の帝国性の解明にまで発展する可能性を秘めている。

しかしながら、換言すれば、これらは提出者の指摘によってあらためて認識の表面に浮かび上がってきた問題でもある。その意味で、これらは提出者自身の今後の課題とすべきであろう。そして、本論文によって指摘された点と、そこから展開されるであろう諸問題は、今後の学界に議論を呼び起こすことは間違いないと思われる。

以上により、本論文は博士学位授与にふさわしいと判断するものである。

公開審査会開催日	2014年 4 月 25 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏 名
主任審査委員	早稲田大学 教育・総合科学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	中国唐代史	石見 清裕
審査委員	早稲田大学 文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	中国宋代史	近藤 一成
審査委員	中央大学 文学部・教授		中国都市史	妹尾 達彦
審査委員				
審査委員				